

メープルレター（70）

あー寒い

何年ぶりかにマイナス25度を越える冷凍庫並みの冬の寒さがやってきました。家に閉じこもり、ひっそりとなりを潜めた日々が1週間ほど続きました。

週末は、夜はマイナス30度に達するほどでした。この寒さでWi-Fiのシステムが半日停止してしまいました。ドリトル先生は、アイパッドを抱えて「Wi-Fiがない、Wi-Fiがない」と家の中を右往左往しておりました。

電気自動車のテスラーは寒さに弱いのか、バッテリーが上がってしまい、100台以上があちこちで立ち往生したと放送していました。停電になった地域では、テスラーに充電できなくなり動けなかったとも聞きました。ドリトル先生は、やはりハイブリッドで正解だった、こんな時にはガソリンで走れると安堵していました。

こんな極寒の中、婿殿の両親がオタワからモンリオールにやってくるのに合わせ、孫の2歳の誕生祝いを早めにするようになりました。マダム田中はティータイムを優雅に皆で過ごそうと、2-3種類のオードブル、鮭のパイ皮包み、ほうれん草のキッシュ、春巻き、鶏の照り焼き、各種サンドウィッチ、お寿司、フルーツサラダ、どら焼き、マーフィンと特注のバースデイケーキでテーブルセッティングをすることにしました。

「イングリッシュティータイムだわ。楽しみ。」

心待ちにしておりました。

もうすぐ着きます、と娘のメッセージがマダム田中に届いた、まさにその時に、火災報知器がガーンガーンとけたたしく建物中に鳴り響きました。

「うそー火事？ 何でこんな時に？」

8年前の火災の記憶がよみがえります。

「アパートから出なくちゃ。」

火災報知と同時にエレベーターが止まりますから、7階分の階段を急いでおりて建物から出なければなりません。しかも外はマイナス27度。5分以上は居られない命がけの寒さです。

「君だけ行きなさい。僕は様子を見るから。」

ドリトル先生はアパートにとどまり、ゆったりとあちこち見ております。玄関ホールは既に人で埋まっていました。消防車がやっとやってきました。この一角は古い重要文化財の建物が多いため、3分で着くはずが、この日は遅かったのです。

「ママ着いたけど、消防車がいっぱい。」

びっくりした娘からメッセージが届きました。

「しばらく車の中に居て。大した事ではなさそうだから。」

ドリトル先生がしばらくするとやってきました。消防士と一緒に優雅にエレベーターから降りてきます。

「あら、貴方だけエレベーター？」

「あちこち点検していた消防士が降りるからって動かしていたエレベーターに乗せてのらったんだ。」

「抜け目ないわね。頑張った私の痛い膝はどうなるの？」

「1階（日本風には2階）のアパートの1室が漏水しているらしい。留守にしている、アパートの窓がしっかり閉まっていなかったらしく、突風で開いてしまい、マイナス30度で部屋中の水道管が破裂し漏水。天井の消火散水装置も破裂して、自動的に火災のように、火災報知器が作動し始めたらしい。1階（2階）は水びたしみみたいだ。ともかく火事ではないから良かった。」

消防士が火災報知器を止めてくれ、部屋に戻れることになりましたが、エレベーターはすぐには作動しません。

というわけで、お客様に6階まで階段を昇ってもらうことになったのでした。

ハーハー途中で一休みしながらやっとたどり着きました。娘は子供を抱っこしたまま6階まで何とか昇ってきました。とんでもないお客様の歓待になってしまったのです。

その後、孫は双方のおじいちゃん、おばあちゃんと楽しそうに遊んでおりました。婿殿の両親とも会うのは結婚式以来です。娘は難産でしたが、孫は無事に2歳になり、子供らしくなってきましたので、皆には嬉しい誕生祝いです。孫娘は水槽のお魚を見ては「ポワソン（魚）ポワソン」と手を打って喜び（ドリトル先生は、孫娘にほだされて、誕生祝に水槽とお魚を送る羽目になり、先日買ってきました）、ピアノの鍵盤をたたいては喜び、家具の引き出しを一つ一つ開けては、ドリトル先生の貝のコレクションに目を見張り、休む暇のない夕べとなりました。2時間も経つと、孫娘は、疲れ果て酔っばらっているかのように言うことがしどろもどろになり溶けてしまいそうでした。マダム田中は、孫娘台風の去った後は、しばし休憩。

孫娘も当節は智慧がつき、先日、コーヒーを飲みに娘の家に立ち寄った時には、1時間も経つと、

「ばあば、バイバイ、おじいちゃんバイバイ」

とそれぞれのブーツと襟巻を差しだし（間違えずに確実にそれぞれの物でした）、コートを指さすと、追い出したのでした。もう十分遊んだから、いいんじゃない、他にすることがあるから帰って、そう言っているのです。それから娘にブーツと襟巻と手袋を差し出し、散歩に行こうと言うっているのです。20年たったら、こうして仕切って男を追い出すのかもしれない。

さてさて、1日が経ち、日曜の夜。ぐっすり寝込んだ、鼻提灯の丑三つ時。またしてもけたたましい火災報知器の音が。

「嘘ー。また火事？アパートでなくちゃ。」

マダム田中は、痛む膝をさすりながら、また非常階段を下りていきました。

「君だけ行きなさい。僕は様子を見るから。」

ドリトル先生は、アパートに残り、今回も、ゆったりと様子を見ています。この人はいつか焼死体でみつかるかもしれません。玄関ホールはまた黒山の人ばかりです。消防士たちは建物中を点検し、

「良いニュースを先に聞きたいですか。それとも悪いニュースからにしますか？」

と謎かけです。

全員一致で、

「どっちでもいいから、早く眠りたい。」

「運よく、今回も地階（日本風には1階）のギャラリーの漏水と消化散水装置の破裂が原因です。火事ではありません。ただ、運が悪い事には、エレベーターはまだ動かないので脚で階段を昇ってアパートに戻ってください。」

オーケーと軽く笑って戻る人もいますが、マダム田中は、エレベーターが動くまで待つことにし、一番最初のエレベーターに乗り込んでアパートに戻って行きました。

こうした二つの火災報知騒動の合間に、日本館で初釜があり、素晴らしい時を過ごしました。背にする日本庭園は、雪深い、白一色の冬景色。美しい、優雅なお茶の手前と美味しい懐石とおいしいお酒のひと時はかけがえのないものでした。

主賓は在モンテリオール総領事です。

「日の丸を背負ってのご多忙な日々でいらっしゃるのでしょうか、総領事。」

マダム田中の問いに、

「日の丸を背負えてよかったと思っています。この素晴らしい、静けさの中の一期一会の文化のある国ですから。。この国でよかったのです。」

意味深い総領事の言葉でした。ドリトル先生ですか、ドリトル先生は着物姿の蝶々のような女性達に囲まれ、我が世の春のようでした。